

◎脳卒中10

座長 伊勢 眞樹

1-6-10 脳卒中患者における rt-PA 静注療法の実態調査 —リハ医学会患者データベースの分析—

¹新潟県立リウマチセンターリハビリテーション科, ²日本リハビリテーション医学会
曾川裕一郎¹, データマネジメント特別委員会²

【目的】わが国でも 2005 年 10 月より、遺伝子組み換え組織プラスミノーゲンアクチベーター(以下 rt-PA)静注療法が認可され、脳梗塞急性期治療法のなかでは高いエビデンスを持った治療法として脳卒中治療ガイドラインで強く推奨されている(グレード A)。今回、「日本リハビリテーション医学会リハビリテーション患者データベース」(以下 DB)をもとにリハ診療の立場から rt-PA 静注療法の実態を明らかにする目的で分析を行った。【対象と方法】DB の登録データ(2010 年 12 月版)を分析した。DB で集計された脳梗塞患者 5,567 例について、入院時に同程度の機能障害(NIHSS 得点)を有する脳梗塞症例を rt-PA 静注療法群(以下治療群)と非 rt-PA 静注療法群(以下非治療群)に分類し、機能障害改善度(NIHSS)、活動制限改善度(modified Rankin Scale, FIM)、自宅復帰率との関連について統計学的に分析した。【結果】治療群では非治療群に比較し NIHSS($p=0.000$)、modified Rankin Scale($p=0.012$)、FIM($p=0.021$)のいずれにおいても有意な改善が認められた。自宅復帰率は治療群 59.1%、非治療群 45.7%と有意差が認められた($p=0.017$)。【考察】治療群と非治療群の背景の違いを考慮する必要があるが、当学会 DB においても rt-PA 静注療法の有効性が示唆された。頭蓋内出血のリスクに対し脳卒中ケアユニットでの急性期全身管理が必要とされるが、安全性、有効性を考慮した超急性期リハの確立が早急に必要であると考えられる。

1-6-11 地域障害者職業センターを利用する失語症者の実態

独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構障害者職業総合センター社会的支援部門
田谷 勝夫

【目的】地域障害者職業センターを利用する失語症者の就労実態および医療機関との連携状況についての実態把握を目的とする。【方法】全国の地域障害者職業センター(53 所)を対象に、過去 10.5 年間(H12-H22)の失語症者の利用実態に関するアンケート調査を実施(平成 22 年 8 月)。調査内容は、(1)失語症者の障害状況(失語症のタイプと重症度、他の高次脳機能障害の合併、高次脳機能障害以外の身体障害の合併等)、(2)支援状況(重点的支援内容、ジョブコーチ利用の有無、医療機関との連携・協力内容、事業所との連携・協力内容等)、(3)利用後の転帰(社会復帰状況)等。【結果】41 センターから回答を得た(回収率 78.8%)。地域障害者職業センター(41 所)を過去 10.5 年間に利用した失語症者は 357 名(再抜除く)であった。利用後の転帰は、就労可能者が 125 名(35.0%)、休職中 32 名(9.0%)、福祉的就労 22 名(6.2%)、非就労者 32 名(28.1%)、転帰不明者 46 名(12.9%)であった。就労可能群と就労困難群の比較により、ジョブコーチ支援の利用、事業所との連携支援、医療機関との連携支援等が失語症者の就労可能性を促進する要因となっていることが示された。

1-6-12 fNIRS を用いた嚥下関連運動時の脳機能活動およびマッピング解析

北海道大学病院リハビリテーション科
浦上 祐司, 生駒 一憲

【はじめに】嚥下運動は、脳幹の延髄を中枢とする反射運動であり、さらに大脳がその運動に促進的・抑制的に関与しているとされる。先行研究においては大脳皮質の関与は fMRI を用いて中心前・後回、島、前頭弁蓋、帯状回、上側島回、中・前頭回が作用しているとしていると報告されている。今回我々は健康被験者に対し、fNIRS(光脳機能イメージング装置; FOIRE-3000: (株)島津製作所)を用いて摂食・嚥下関連動作(以下タスク)時の脳血流の変化を計測した。解析は Dr.Jong Chul Ye(KAIST)により開発された NIRS 用の一般線形モデルを用いた統計マッピングソフトウェア NIRS-SPM(Statistic Parametric Mapping)を用いた。【対象】対象者は年齢が 20 歳以上 65 歳未満で摂食・嚥下障害・構音障害がなく、頭頸部の手術の既往がない被験者 20 名。【方法】対象となる被験者の頭頂部に帽子状のフォルダを装着し、嚥下運動のモニタリングとして甲状軟骨周囲に空気パッドを装着した。タスクは、ブロックデザインとして右手指、口唇、舌の運動、液体嚥下(チューブにより口腔または咽頭へ直接注入)を行い、事象関連デザインとして液体嚥下を行った。【結果および考察】中心前・後回の嚥下関連部位タスクに依存した有意な賦活が認められた。中には左右差や他部位の賦活を認める例も認められた。fNIRS の信号は脳信号以外の頭部信号(頭皮、側頭筋)の重量が考えられ、嚥下関連動作においてこれらの重量成分の影響を取り除くプロトコルやデータ処理法の検討が精度向上に有効であると思われる。